

宮前鉦山跡調査成果の概要

- 1 遺 跡 名 宮前鉦山跡（みやまえこうざんあと）
- 2 遺跡の種別 生産遺跡（銅製錬遺跡）
- 3 遺跡の時代 江戸時代中期（18世紀）
- 4 所 在 地 多可郡多可町加美区多田
- 5 調 査 原 因 （砂）宮前東谷川 通常砂防事業
- 6 調 査 主 体 兵庫県教育委員会
- 7 調 査 機 関 （公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
岸本一宏副課長、渡瀬健太技術職員

8 調査の概要

- (1) 丘陵端に近い谷部分で、傾斜地を段状に構築した約 10 箇所の平坦地を、約 1,200 m²にわたって調査した。
- (2) 石垣を積み上げて構築された平坦面は、長辺（南北方向）8 m以上～約 18m、短辺（東西方向）約 6～12mの規模を測る。そのうち5つは接続部の溝を挟んで、接続している。
- (3) 各平坦面では、石組・石敷施設や土間・石組溝などの遺構を検出した。
 - ア 石組・石敷施設の規模・形状
 - ① 周囲を石列（石垣）で囲み、一辺 1.5m程度、高さ 30 cm程度の方角としたもの
 - ② 一辺 3.5m程度で石を敷き詰めた低い構造のもの
 - ③ 一辺 5 m程度の方角区画の内部に石を敷き詰め、その上を土で覆ったもの
 - イ これらの遺構は、それぞれ異なった平坦面に構築されている。
 - ウ 石組・石敷施設は製錬炉の下部構造と思われ、防湿のために石敷としたと思われる。
 - エ 建物の束石が残る平坦面では、さらに覆屋が伴っていたと推定される。
- (4) おもな出土遺物
 - ア 肥前系の陶磁器の碗などの破片や、丹波焼すり鉢の破片や土師器皿や炮烙（ほうらく）など、多数の陶磁器の破片が出土した。
 - イ 銅銭（寛永通宝）やキセルなどの金属製品も多数出土した。
 - ウ 一方、銅製錬にかかわる遺物として、鉦石が溶けて固まった薄板状の「カラミ」が多く出土し、製錬工程でできる「鉦（かわ）」のうち、捨てられた不要なものと思われる。

9 ま と め

- (1) 石組・石敷施設は規模に大小があることから、製錬炉自体の規模を反映していると考えられるため、製錬工程が単一ではなく、複数工程に分かれていたことが推定できる。
- (2) 出土した遺物の年代は、18世紀第2四半期～第3四半期にほぼ限定されることから、宮前鉦山の銅採掘・製錬が開始される享保 12（1727）年と同時期であり、本地区ではその後約 50 年間操業されていたことが判明した。



調査区全景（空中写真）



調査区全景（谷口方向から）



平坦面を構築する石垣



石組遺構（製錬炉下部構造）



石敷遺構（製錬炉下部構造）



出土遺物（肥前系磁器）



出土遺物（薄板状のカラミ）